

白衛隊 三国志

半村良・原典

吉田親司

赤壁の戦い 下

THE SELF-DEFENSE FORCE IN THREE KINGDOM SAGA
BATTLE OF RED CLIFF



THE SELF-DEFENSE FORCE IN THREE KINGDOM SAGA BATTLE OF RED CLIFF 2

赤壁の戦い下

半村良・原典

吉田親司

目衛隊 二国志

世界文化社

第6章

柴桑城擾乱

1 舟艇

7

2 艦長

13

3 再会

24

4 舌戦

32

第7章

聚鉄山焼き討ち

1 策謀

55

2 帰参

60

3 肉薄

65

4 聚鉄山

74

5 戦火

79

第8章

埋伏の毒

1 乱戦

93

2 転覆

122

第9章 東南の風

1 苦肉	127
2 進水	140
3 出師	149

第10章 赤壁燃ゆ

1 小火	157
2 火船	160
3 敗色	165
4 海戦	170
5 垓下	177
6 遁走	191

エピソード

時の碑	208
-----	-----

赤壁周辺地図	214
--------	-----

天津光照

●陸上自衛隊3佐。自衛隊武漢派遣PKF部隊の指揮官。

劉備玄德に軍師として迎えられ、諸葛亮孔明の役割を果たすこととなる。

伊庭遙佳

●陸上自衛隊1尉。武漢派遣PKF部隊の副隊長。

女性幹部ながら槍術と格闘術にすぐれ、趙雲子龍の役割を担う。

木曾城司

●陸上自衛隊3曹。普通科所属。デジタル機器に強く、先進装備とともに

最前線に投入される。

平本介次

●陸上自衛隊2尉。通信科所属。三國志マニアで歴史に造詣が深い。

●関羽雲長の養子となり「関平」を名乗る。

浅場勝彦

●陸上自衛隊2曹。普通科偵察部隊所属。無類の二輪車好き。

有藤 宰

●陸上自衛隊1曹。普通科所属で、遠距離狙撃の名手。関羽に狙撃術を伝授する。

真崎伸也

●陸上自衛隊2尉。機甲科所属で、一〇式戦車部隊を率いる。

河原 岬

●陸上自衛隊衛生科所属の医官。凄腕の外科医。

小橋保治

●陸上自衛隊3尉。警務科所属。自衛隊との連絡役として、木曾3曹とともに

LPD（フライング・タイガース）に乗船する。

魯和深

●国際連合の外郭団体から派遣された通訳。単福を名乗って自衛隊の存在を劉備に伝え、さらに魯肅子敬として孫権に仕える。

ダニエル・ケイシー

●米海軍大佐。LPD（フライング・タイガース）艦長。呉の軍師・周瑜公瑾の役割を負わされる。

劉備

●字は玄徳。中山靖王劉勝の後裔で漢王室の復興を目指す。臥龍崗に潜んでいた自衛隊を訪ね、天津3佐を軍師として迎える。

関羽

●字は雲長。劉備・張飛の義兄弟。知力と義侠心に溢れる豪傑。対物ライフルによる遠距離狙撃の才能を開花させる。

張飛

●字は翼徳。劉備・関羽の義兄弟。怪力と勇猛心を誇る豪傑。近代火器を手にして、さらに凄まじい戦闘力を発揮する。

孫権

●字は仲謀。孫堅の次子で孫策の弟。呉王として、曹操軍と戦うか、投降するかを選択を迫られる。

曹操

●字は孟徳。献帝を掌中に収め、漢王室の丞相として権勢を揮う。劉備を最大の脅威とし、劉備軍と自衛隊の殲滅を狙う。

馬懿柱

●『北中華人民共和国』人民解放軍空軍大校。タイムスリップ後、曹操軍に降り、司馬懿仲達の役割を担い、首席軍師として劉備軍と戦う。

装幀……………コガワ・ミチヒロ
カバーイラスト……長野 剛

第6章 柴桑城擾乱^{じようらん}

1 舟艇

戦乱の夜が終わり、静謐^{せいひつ}な朝が来た。

顔をのぞかせた日輪が長江の水面に反射し、虹色の光輝を周囲に放っていた。

雲一つない蒼空^{あおぞら}は早々に朝焼けを済ませ、群青に色合いを変えている。今やそれさえも通り越し、微妙に黒ずんでさえいた。

河岸に群生している蘆^{あし}が東南風^{たつみかぜ}にそよぎ、規律的な動きを示していた。遠方からはまるで手招きをしているかのように見えよう。

LCAC^{エル・キャック}はそうした牧歌的な風景をバックに河面^{かわも}を駆け下っていく。

その長閑^{のどか}な風景にマッチしているとは言いがたい。鋼鉄のミズスマシは轟音を四方八方に撒き散らしているのだから。

それも当然。このエア・クッション型揚陸艇は自然と調和する船ではない。破壊と死をもたらす兵器なのだ。

着目すべきなのはその脚力だった。

獲物を効果的に捕らえ、また脅威から逃れるため、足は速い。現在のところ、燃費と防諜を考慮し、一五ノットという微速で進んでいるが、船尾に設けられた二基のプロペラを高速回転させれば四〇ノット以上を発揮できる。時速換算で七〇キロを楽に超える値だ。

二一世紀でもこんなマシンはそうそうない。

いわんや三世紀では絶対に存在を許されない。

つまり、ここにはいけない船だった。

そう。マッチしていないのは風景だけではなかった。L C A C は、この時代ともマッチしていない物体なのであった……。

ワイパーが水滴を拭き取った痕跡は何となく果物の切断面を連想させる。

そう言えばずいぶん長い間、柑橘類かんきつるいを口にしていない。檸檬レモンか蜜柑みかんが欲しかった。もやもやした煮え切らぬ迷いを振り払うには、舌に刺激を与えることが最上なのだが。

禿頭の男はそう思いつつ、操縦席の強化ガラスにまわりつく飛沫を見据えていた。

彼は魯和深。

対外的にはそれが本名ということになってい

るが、事実は違う。

また国際連合から報酬を得ていると称していたが、必ずしも正確ではない。魯は真のスポンサーに、親から与えられた名前を剝奪はくだつされていたのである。

別に疑問も感じず、無念とも思わなかった魯であったが、すべてのしがらみから解放された現在、彼の視野は格段に広がっていた。

激変した環境が、彼自身をも大きく変えたのだ。

思えばこれまでの生涯は裏目と妥協たきようの連続だった。生まれつきの裏街人生。主役になれるのは己の葬式だけ。この黒衣くゐとしての境遇から這い上がることは絶対にできない。青年から壮年になるにつれ、そんな固定観念は、受け入れるしかない現実になりかけていた。

だが、偶然と必然が交錯した結果、意図せず
に時間の漂流者となった彼は、様々な軌くわから解
放されていた。

過度に大胆になったこの男は、烏滸うごがましく
も魯爾子敬ろしきけいを名乗っていたのである。厚かまし
さここに極まれりという偽名だが、恥じ入る必
要はなかった。日本人のくせに、さらなる大英
雄を自称する男がすぐ側にいるのだから。

「まっすぐ柴桑城さいそうじょうに行くのか？」

齒切れのいい日本語が、狭苦しいL C A Cの
コックピットに陣取る魯のヘッドセットに流れ
た。

発言者は天津光照3佐だった。

この世界に流された陸上自衛隊の総責任者で
あり、こともあろうに諸葛亮孔明の役割を果た
している男である。

「柴桑城は九江郡における防衛拠点だ。そこに
呉の最高責任者——すなわち孫權そんけん仲謀ちゅうぼうがいるの
だろう。速やかに彼と面談し、手を組むべき人
物かどうか見極める必要があるぞ」
すぐに魯は言い返した。

「我が君は少しばかり短慮たんりょな面もありますが、
まずもって傑物と賞するに足る人物。その点は
あたしが保証いたします。また若き国王は多忙
を極めておられますから、このまま直行しても
すぐ面談できるわけではないのです」

「なら何処に行く気なのか？」

「鄱陽湖はようこです」

天津は感情を交えぬ声で訊いた。

「それは我々の知識では甘棠湖かんとうこと呼ばれている
場所だろうか？ だとすれば私は美周郎びしゅうろうと面談
しなければならないようだな」

「ご賢察、痛み入ります。先ほど無線連絡が入りました。周瑜殿には柴桑へ赴くよう依頼しておきましたが、現在に至るも動きを見せておりません。我らの水軍大都督は依然として迷っておられる様子。どうかあのお方を動かすためにも、お力を拝借したい」

天津は真一文字に結んだ口を開くと、

「予定変更か。関羽や張飛たちを夏口に向かわせて正解だった。彼らは大胆かつ慎重なのだ。行先の修正は警戒感を煽るだけ。そうなれば同盟締結の可能性さえ薄れよう」

安易な共闘を拒絶する一言に、魯は身の震えを感じていた。もはや認めるしかなかった。

ここに天津3佐を単独で連れてきたのは、やはり失策であったと。

戦力分散は褒められない行為だが、厄介事も

また分散させると面倒になる。魯の狙いは劉備軍と自衛隊の首脳を一堂に集め、意見の統一を促すことにあった。

こうすれば、いざという場合には彼らの生殺権を握れる。関羽雲長や張飛翼徳たち豪傑も銃の前では無力に近い。数名を人質にとつて、相手を意のままに動かすもよし。面倒なら物理的に排除するもまたよし……。

そんな目論見はあっさり崩れてしまった。

天津3佐は断言したのだ。私単独でなければ柴桑城には行かないと。

度胸のよい向こう見ずなのか？ それともなにか思惑があるのか？

魯は天津の心中を測りかねていた。一筋縄ではいかない男であるのは確かだが、まだ手はある。必ずやこちらの意に添うように操ってやる

……。

「天津隊長は同盟がご破算になると仰るのですか。劉備玄徳殿は、呉との共闘構築を希望しておられると思っておりますが。それが我々の共有する認識のほうでは？」

疑念を呈した魯へと、天津は視線を動かさずに解答した。

「歴史は女よりも始末が悪い。我らが保有するメタ（高次な）情報、すなわち史実とやらがこの世界でも通用すると考えているのなら、手痛い打撃を蒙るだろう。」

味方だけならばともかく、敵にも同一の知恵者が存在する以上、こちらのアドバンテージは想像以上に小さいのだ。そう考えて動かなければ貴様は自分の死に直面せねばなるまい。

三国志に精通する平本^{ひらもと}2尉から聞いた。魯爾

は西暦二一七年まで生きたらしいが、この世界ではどうなるか判らないと。

個人の気まぐれで第三者の運命が激変するのはここでも同じ。特に、勝手な都合で単福^{ぜんぷく}や魯爾といった先人の名を使い分けるような男は、それ相応の覚悟が必要となるな」

天津は腰に差した九ミリ拳銃に手を添えたが、魯は不敵な笑みを見せると、

「天才軍師の名前を騙る御仁^{かた}が何を申される。もし二一世紀の三国志ファンが貴殿の立ち場を知れば、羨望^{せんぼう}と嫉妬^{しつと}のあまり、身を振^ふって悔しがるでしょうに」

「歴史に後押しされたことは認めよう。だが、煙にまく気はない。永遠に時間に翻弄^{はんろう}されるのが我らの運命らしいが、逃げたりはせん。逆に時間を追ってやるつもりだ。」

ミスター魯。このL C A Cは何時何分に鄱陽湖に到着するのか？」

「時間を無視することを美德とする大陸的思考に染まったあたしには判りかねますね。訊いてみましょう」

過度なまでになめらかな英語に切り替えた魯は、両手で操縦桿を握る男に声をかけた。

「カーン中佐。到着予定時刻は？」

操縦席に座る線の細い人物は、計器盤に視線を落とした。

米国テキストロン社製のL C A Cは、ヘリコプターの設計思想が根底に流れているためか、操縦席は航空機のそれを連想させる形式だ。速度計を睨んでから、男は反射的に言った。

「オンタイムです。一六〇〇時に遅延なく到着します」

臨時に操縦手を務めるネイザン・E・カーン中佐は、五名で構成されたL C A C乗員の筆頭者たる海軍将校である。残る四人の乗組員もすべてアメリカ軍人だ。

母艦への帰途にある彼らは安堵かんどしているようにも見える。兵隊の頭数こそ減ったが、やはり同胞の側へ戻るのは心強いのだろう。

魯は思った。哀れな連中だ。これから真の戦闘が始まろうとしているのに、その事実を知らない。いや、知ろうと欲しないとは。

多くのアメリカ人は、東洋文化への関心が薄い。異世界に放り出された現在でも、同じことである。この先、何が起こるか察知できる立場にあるのに、その努力さえ懈怠けたいするのだ。三国志のアウトラインくらい承知していても罰は当たらない……。

そんな魯の思いとは別に、天津3佐は冷徹に事実だけを述べた。

「午後四時か。本日は周瑜役のダニエルを口説き落とすので精一杯だ。柴桑城に向向き、孫權將軍と面談するのは明日以降となるな。」

今日のところは、ミスター魯の思惑どおりに動くしかなさそうだ」

形式的に頭を下げた魯は、殊勝じゆしやうな声で、

「時間は我々にとって敵でありますが、扱い方しだいでは味方にもできましょう。」

そのためには我々の相互理解が必要となります。まずは自衛隊と（フライング・タイガース）の連絡を密にし……」

問髪を入れず、天津は言い返した。

「前もって言うておく。電波は絶対に出すな。人民解放軍は聞き耳を立てている。間違いない」

空爆されるからな」

2 艦長

遠方から響いてきた爆音は、紛れもなくLC ACのそれだった。

それが帰投の合図となった。緊急事態以外、無線は使うなど致命したのはこちらだったが、やはり気配を感じ取れるまでは不安で仕方がなかった。

もともとは深紅おほと思しき色あせた艦長席から立ち上がり、窓際へ急ぐ。足首と腰にあらためて負担がかかった。三十路みそぢも半ばを過ぎた身に、傾いたブリッジはつらい。

合衆国海軍大佐ダニエル・ケイシー艦長は鈍痛をこらえ、固定双眼鏡へと向かった。

アイピースの視野に二日前の深夜に見送った一号艇^{ファースト}の姿が飛び込んできた。異常はなさそうに見受けられる。どうやらミスター魯は首尾よく任務を終えたようだ。

すぐさま艦内放送のスイッチを入れる。太陽発電システムがまだ稼働しており、電源に問題はなかった。

『総員に告ぐ。こちらは艦長ケイシー大佐。L C A C 一号艇^{ファースト}が帰投した。繰り返す。L C A C が帰投した。艦尾ドック扉オープン。操作員は至急配置につけ』

その声は甲高く、それでいて艶^{ツヤ}は失われていない。百人が聞けば百人とも、発言者は女性だと断言するだろう。

「艦長。その命令を遂行できる水兵はもうおりませんぜ」

後ろから投げかけられた不遠慮な声に振り向くと、機関長のハット・Y・カパーウッド中佐が立っていた。

彼は五四歳。残された士官では最年長だ。機械油にまみれ、もはや元の色が不明になってしまったオーバーオールを着込んでおり、頭には黄色い作業ヘルメットを被^{かぶ}っている。安全確保というより禿頭を隠すための工夫らしい。

「先週の脱走騒ぎ、覚えておられますな。ウェルデッキ配置員は一人残らず消え失せてしまいましたよ。もう艦尾扉を操作できるのは本職だけでしょうなあ」

やる気のなさがひしひしと伝わってくる返事に苛立ちを感じたケイシー艦長は、色気を微塵^{みじん}

も感じさせないハイウエストのタイトスカートに片手を添え、精一杯の虚勢を張った。

「頭数が不足なのは承知しています。こうした重要事項を艦長である私が通達しなければならぬ現実が、それを裏付けていきましょう。」

副長のカーン中佐を手元に残しておかなかったのは失敗だったかも知れません。

ならばカバード中佐。あなたが操作するのは。ここブリッジに来たのは現地民の抗争に積極参戦せよというリクエストを繰り返すためでしょうが、何度来ても同じこと。現状では保留以外の返事はできませんよ。今はできることを行うのが建設的というもの。判ったら急ぎなさい！」

ブリッジ内部に響いた自分の叫声はヒステリックな悲鳴に近かった。己の耳朶にそれが響く

まですっかり忘れていた。

この身が女であるという現実を……。

*

ダニエル。

それは男性でも女性でもつけられる名前ではあったが、軍人という立場上、やはり男性だと誤解されることが多かった。

とはいえ望んで海軍兵学校に入学した以上、親を恨んでも仕方がない。この名を跳ね返すに充分な実績を積みばいいだけだ。

航海を専攻した彼女は、すぐフリーダム型沿海戦艦に配属され、頭角をあらわしていた。

そして三二歳で中佐に昇進した彼女は、職場

で生涯の伴侶となる男を見つけ出した。容姿は冴えないが、真摯に任務に打ち込む態度に惚れたのだ。

ラーズ・リトルブリッジ少佐。オリエンタルな風貌を持つ年下の男だった。

聞けば祖母が台湾系の女性だという。つまりクォーターであり、その顔立ちにも東洋の風情が色濃く残っていた。

航空母艦の機関科士官だ。具体的には原子炉担当技師であり、また生粋の白人ではなかったため、頭の固い両親は反対したものの、最後は折れた。最後の戦闘航海から相手が戻ってきたら、すぐ結婚式をあげる予定だった。

あいにく、多くの女性が抱くささやかな夢は、夢のうちに終結した。彼はCVN-65（エンタープライズ）に乗っていたのだ……。

巨艦「ビッグE」は北中華人民解放海軍の空母（赤壁）と渡り合い、完膚無きまでに撃破されてしまった。被害応急が功を奏し、沈没だけは免れたものの、生存者リストにパートナーの名前を見つけることはできなかった。

軍人は常に死に直面している職業。当たり前すぎる現実を再確認した彼女は、すべてを忘却すべく、任務に没頭した。

合衆国の対中姿勢は日本との共同戦線構築にまで発展していたが、ダニエルに仇を討つ意志などなかった。

軍人としての務めさえ全うすれば、手の届かない場所へ行ってしまったリトルブリッジも許してくれよう。まずはそれで充分だった。

だが、祖国は英雄を求めた。婚約者の戦死すら毅然として受け入れ、復讐に燃える若きヒロ